

雷門中のベータちゃん！

もちごめさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

捏造設定盛り盛りのベータちゃんが円堂教に入信するお話。

(ネット徘徊中) あっこのベータって子かわいい！書きたい！↓でもイナイレ無印の頃しか知らん：↓まあええか！（思考放棄）ってな具合に書いたのでGO要素はほぼないです。化身とかアームドとかミキシトランスとかはありません。

あとサッカー描写にも期待しないで：

全二話。

目次

後編 前編

--	--

29 1

前編

「なあーキミ、必殺技が使えるって本当か!？」

突然のことに、私は面喰らっていた。

お昼休みの食休みに、ぼーっと頬杖を突いて空を眺めていた時、教室の引き戸をがらがらしゃーんと大音響で突破して、目をきらめかせながら私の机にやってきたこの男の子。クラスも違えば話したこともない。米田^{ヨネダケイ}佳という名前の、ごく普通の女子中学生たる私とはほとんど接点がない男子生徒の奇行に、教室に残ったクラスメイト達が奇異の視線を向けていた。

名前も知らない男子生徒がどんな目で見られていようがどうでもいいが、しかしそれに巻き込まれてはたまらない。私は柔和な笑みを浮かべて、彼との間に一線を引いた。

「えーっと、必殺技?それって何のことを言ってるんですか?」

「もちろん、サッカーのことだよ!ほら、こう……ズバババーンってさ。すげーかつこいやつー!」

まあ、そうだろうな。と内心で思いながら、両手を振り回して『すげーかつこいやつ』を表現しようとする彼に適当な相槌を打つ。

「で、どうなんだ？」

まるで子供みたいに……いや実際中学生なのだし子供だが、ともかく純真な眼で私を見つめ、ずいっと顔を寄せて期待に鼻を膨らませる彼に、私は思わず身を引いた。

(うわあ……どれだけ必殺技に興味津々なんですかこの人……)

暑苦しいほどの熱意。サッカーバカ。ドン引きを禁じ得ないこんな阿呆に、一人だけ心当たりがあった。

「え、円堂くん……だめだよ違うクラスにいきなり入っちゃ。佳ちゃんもびつくりしてるじゃない」

聞き覚えのある声に、そちらを見やる。開け放たれた教室の扉の陰から女子生徒がひよっこり顔を出していた。「失礼します」と敷居を跨ぎ、教室に入ってくる。新たなるよそ者の登場にクラスの皆が注ぐ視線を一身に浴びながら、居心地悪そうに身を竦ませる彼女を、私は手招きして呼び寄せた。

「ありがとう。ごめんね、佳ちゃん。その……色々と」

「気にしないで、秋さん。元はこの方のせいなんですもの」

うぐ、と、さすがに『この方』が誰を指すのかには気付いた彼が、気まずそうな顔をする。その様子をちらと見、彼女はため息をついた。

「そ、それは分かっているけど……円堂くんをそそのかしちゃったのは私だし……やつぱ

りごめんなさい」

そう言つて彼女は、木野秋はまた彼のほうを見て、二度ため息をついた。

彼女とは幼少のころからの友人だ。きつかけはもはや覚えていないが、幼い頃はよく二人で遊んでいた。その繋がりは彼女がアメリカに旅立つてからも細々と続き、帰国した今でも生きている。時折二人で出かけるような間柄だ。

そんな彼女は今、サッカー部のマネージャーをしている。そのことを話題におしゃべりすることもあつて、私はサッカー部のキャプテンがかなりのサッカー好きであることを知っていた。

「ああ、そうだ。紹介するね。この人が、前に言つたうちの部のキャプテン」

手で示されたその男子生徒が、ニカツと効果音が出そうなほどの満面の笑みで自身の胸を叩き、告げた。

「俺、円堂守。よろしくな！えーつと……ベーター！」

そう、円堂守。とある事情でサッカーから離れていた秋さんをまたそこに連れ戻した、真正のサッカーバカだ。そんな彼が息巻いて必殺技が云々言えば、それはサッカーのこと以外ありえないだろう。

いやしかし、それにしても、

「ベーター、というのは？」

「え？キミの名前じゃないの？米田佳」ベータケイ

どうやら漢字は苦手らしい。さすがサッカーバカ。

「円堂くん……それはさすがに……」

心底呆れたといったふうに秋さんが頭を抱える。

能天気「何が？」と首を傾げる円堂さんに程度の低い冗談であった可能性も消され、私がかぶりを振って言った。

『ベータ』じゃなくて『ヨネダ』と読むんです。ちゃんと覚えてくださいね？ふふ、こんな間抜けな訂正、初めてしました」

円堂さんの顔色が青く逆戻りしていくのを愉快的気分で見届けると、私は「ところで」と続けた。

「私のこと、秋さんから聞いたんですよね？ならたぶん、全部真実ですよ」

「え!?じゃあ……」

「はい。サッカーしていましたし、必殺技も使えましたよ。昔のことですけど」

私がサッカーを始めたのは秋さんがアメリカに発してからであつたから、秋さんは私がプレーする姿を見たことがない。しかし手紙には何度も書いた。当時彼女もサッカーにはまっついていて、長い間手紙の内容はそれが中心だったのだ。

チームに入って間もなくレギュラーの座を勝ち取ったこと。必殺技を習得したこと。

そして、サッカーをやめたことも、私は律儀に書き記していた。

「うおおお！マジか！すっげー！」

見ているこつちが恥ずかしくなるくらい大げさに喜ぶ円堂さんに、私は苦笑する。

その一瞬の間、唐突に彼の両手が伸びてきて、卓上の私の手は掬い上げられた。

幸いなことに、直後頬を染めて動揺する秋さんの表情に色々察したおかげで冷静を取り戻し、醜態を晒すこともなかった。右手を包み込むようにぎゅつと握られた私は、下世話な感情を引つ込め、その羨望の眼差しを見つめ返した。

「じゃあさ、もしよかったらその必殺技、一回俺たちに見せてくれないかなあ？実はうちの部、皆一緒に練習してくれなくつてさ。でも必殺技見ればきつとやる気になると思うんだ。ていうか、いつそのこと入部してくれると嬉しいんだけど……どうかな？」

円堂さんの表情が、期待と興奮から徐々に私の顔色をうかがうものへと変わっていき、その様子に隣の秋さんが一瞬はつとして、次いで気まずそうに眼を逸らすのを意識して認識から外すと、私は円堂さんにこりと微笑んでみせた。

「ごめんなさい。どちらもお断りします」

「え……あ、そつか……でもその、なんで？」

先と一切変わらぬ笑顔を、私は維持し続けた。

「私、女の子ですから」

結局この後、円堂さんは私の適当な理由に首を傾げながら何分か粘ったが、昼休み終わりのチャイムが鳴ると同時に秋さんに制服を引つ掴まれ、引きずられて帰っていった。

午後の授業も終わり、週一の委員会当番をこなしてすっかり夕暮れ模様染まった空の下。要約すれば『早く帰れ』という意味合いの校内放送を背中で聴きながら、校門を出た私はぼんやりと物思いにふけていた。

「サッカー、かあ……」

昼休みに見た円堂さんのあの表情。サッカーが好きで好きでたまらないと、全身でその思いを発する彼のが、妙なもやとなつてずっと頭に残っていた。

そこから絶えず生まれ続けるのは、彼の瞳の色と同じく、羨望だった。

私にも、サッカーに熱中していた時期があったのだ。

ボールを奪って、ディフェンスを抜いて、シュートして。ある日突然飽きてしまったけれど、その時までには私も円堂さんと同じように——いやすがにあそこまで狂った熱ではなかったが——四六時中サッカーのことばかり考えているような子供だった。

あの時の熱をまた感じたいという思いは、今でも残っている。

秋さんのこともそうだ。彼女の周辺で色々があつた時期と私がサッカーをやめた時期が、何の因果か重なつてしまつたせいで、秋さんは私がサッカーをやめた理由がそれにあるのではと不安を抱いてしまつてゐる。

言葉での説得はだめだ。何を言つても信憑性を演出できない。なにせやめたのは幼子から抜け出せたとは到底言えないような歳の頃。飽きた理由などもう覚えていないのだ。

秋さんの憂慮を払拭するためにはその根底、私がサッカーに飽きたという事実からひっくり返すほかない。

そういつた意味でも、円堂さんのことが羨ましかつた。あの頃のような熱量があれば、そんな面倒も、「キミ暇でしょ？」と先生に捕まつて、やりたくもない委員会の仕事を押し付けられることもなくなるのに。

そんな煩わしい空虚を埋められるというのに。

「——と」

ふと、私はそれに気が付いて、足を止めた。

極々小さな音が耳の中に入り込み、芋づる式に夢想の中にあつた聴覚が正常を取り戻す。

音の大部分を占めるのは、緩やかでいて力強く流れる川の奔流。いつの間にか私は橋

の上 にいた。

すでに四分の三ほど渡りきってしまったそのトラス橋の側面には、町名をアピールする稲妻を模した大きなシンボルマークがでんと張り付いている。

こんな橋は私を知る限り一つだけだ。そしてそれは、私の登下校ルートに含まれていない。

どうやら上の空で歩いているうちに、どこかの角を曲がり損ねてしまったようだった。

「——おい」

人の声というものは、雑多な音の中でも以外に目立つものだ。水音と車の走行音をかいくぐり、二度目にして私はその呼び声の発生源を見つけ出した。

欄干から身を乗り出すと、河川敷のサッカーコートで円堂さんと秋さん、そして数人の少年少女が笑顔で手を振っていた。

(円堂さん一人なら適当にあしらえたのに……)

小学生くらいの子供がいるとなれば、無視するわけにいかないじゃないか。

まさか狙ってやっているわけではなからうが、多少の憤りを覚えながら彼らに手を振ってやる。反応が嬉しかったのか、ぱあっと瞳を輝かせ、さらに激しく全身を振り回す小学生たちを目にしてしまえば、私にはもうその期待を裏切るようなことはできな

かった。

観念して堤防の階段を降りると、私は一瞬にして小学生たちに取り囲まれた。かけられる言葉は「すげー」とか「ホンモノだー」とか要領を得ず、まるで自分が有名人かあるいは珍獣にでもなったような心地だった。

自分の何が彼らの琴線に障ったのか、さっぱりわからず適当に笑顔を作つてやることしかできない。一步離れた位置でその様子を見守る二人に子供たちをどうにかするつもりはないらしく、円堂さんに至つてはむしろその輪に加わりたがっているような気さえした。

唯一秋さんが苦笑していることが私の感性が正常であると証明してくれてはいたが、やはり彼女にもそれを解決してくれる気配はなかった。薄情者め、と恨みがましい視線を秋さんに送つてやるも、彼女はそれに気付き、「ごめんなさい」と眼で言つたきり手元のボードを読むふりをして顔を隠してしまふ。

そうしているうちに子供たちのほうもヒートアップし始めて、いつしか喧噪の中には「好きな食べ物は何？」等、訳のわからない質問が散見されるようになっていた。

激しくどうでもいい問答に当たり障りのない返答を繰り返しながら、その收拾のつかなさ^さに困惑が憂鬱に変換されていく。その最中、頭を捻^さつて質問の次弾を考える子供たちの中の一人、ピッグテールの女の子が意を決したように一步前に進み出て、緊張と興

奮のまま言った。

「あ、あのっ！ 円堂ちゃんたちから聞いたんですけど、お姉さんがサッカー上手だって、本当ですかっ」

勢いに任せて女の子が言い切った瞬間、周りの子供たちも目の色が変わった。やはり同じように緊張を見せながら、興味津々に私へ視線を集中させている。

「なるほど」

大体の事情は飲み込めた。

「上手だったかはわかりませんが、サッカーはしていましたし、必殺技も使えましたよ」

一斉に「おお」と歓声が上がる。どうせ円堂さんが色を付けてしやべったのだろう。その中でも女の子の喜びようは際立っており、円堂さん張りの瞳のきらめきに私は頭痛がする思いだった。ただでさえ少ない女性サッカープレイヤー。しかも必殺技が使えるのだと、寄せられる期待が実に重苦しい。

「じ、実はわたしも必殺技の練習してて……でも、あの、あんまりうまくいなくて……その……」

と、話すうちに緊張のほうに勝ってきたのか、段々としどろもどろになっていく女の子。顔を真っ赤にして縮こまってしまおう彼女に、背後の円堂さんがニカツと笑った。

「俺は必殺シユート使えないし、キーパー技の特訓もしなきゃならないからさ。もしよかつたらベータ……じゃなくて、米田にコイツのコーチしてほしいんだよ」

円堂さんに頭へ手を置かれ、女の子がぶんぶん首を縦に振る。

だからそんな風にされると、断るに断れないじゃないか。

悩んだ末にどうにもならず、私は内心でため息をついた。

「……まあ、アドバイスクらいならできると思いますが——」

「よつしやーじゃあ練習再開だ！頼んだぜ、ベータ。マコは頑張れよー」

言質をとるや否や、円堂さんのその一声で子供たちは蜘蛛の子を散らすようにコートに戻っていった。唯一女の子、マコだけがガチガチに緊張しながら、「よ、よろしくお願ひします！」と頭を下げていって、私はたちまち寒々しくなったその場で、サッカーバ力を筆頭とした子供たちの忙しなさにただ圧倒されていた。

（どうかあの方、またベータって呼びましたね……）

気を付けようという気持ちはあるみたいだが、もう円堂さんの無意識で『米田』の字に『ベータ』というルビが焼き付いてしまっているのだろう。この頑固さ。修正は諦めた方が賢明かもしれない。

（今後深く関わることもないでしょうし）

呼び方なんてどうでもいいか。

そんなことを考えながら立ち尽くしていると、ずいぶん控えめな音量で秋さんの声が右耳に届いた。

「あ、その……佳ちゃん。こっち座る？」

ドリンクやらタオルやらを置いてあるベンチに腰かけて、見慣れてしまった気まずそうな表情の秋さんがその隣の空席をポンと叩いた。

私は誘われるがまま、その席に座る。人数の関係か、コートのみ面だけを使って守備と攻撃の練習を始めた彼らの微笑ましいサッカーを眺めていると、やはり秋さんがおずおずといったふうに口を開いた。

「今日は、本当にごめんね？お昼の時も今も、私が不用意に佳ちゃんのこと話したせいで迷惑ばかりかけちゃった」

「もう……だから気にしないでって言ったじゃないですか。今度もそうですけど、そのことについて秋さんを迷惑に思ったことはないです」

攻撃チームの男の子が放ったシュートと、それを危なげなくキャッチする円堂さんを見届けて、私はそう言うのと秋さんに向き直った。

苦笑を浮かべる彼女に『しいて言えばそれが迷惑なんですけど』と内心で思い、しかしそれをおくびにも出さず私は言った。

「というか、そもそもサッカーのことで秋さんが私に遠慮する必要はないんですよ？私

がサッカーをやめたことと秋さんがサッカーから離れたことは、全く関係がありませんから」

建前でも何でも無い。間違いなく本心で、事実だ。会うたびに必要のない懺悔をされるのは飽き飽きなのだ。

けれどやはり、いくら真剣そう伝えようとも秋さんには届かない。相も変わらず彼女は自責の念に囚われたまま、申し訳なさそうに顔を歪めるばかりで、わかっていたとはいえ嘆息せざるを得ない。

(ままならないものです……)

私は秋さんの過去に遠慮してサッカーをしないのではなく、単に飽きたからサッカーをしないだけなのだ。

「そう、ね……」

秋さんが曖昧に笑う。

何度言っても聞き入れてもらえない。私のその理由が遠慮した故の建前だと、頑なに信じ込んでしまっている。

「佳ちゃんはやさ、どう思うっ?」

「……はい?」

私が気落ちしている間に、秋さんの視線はコート外の賑やかな練習風景に移っていた。

何のことかと訝しむ私に彼女が指をさす。

「マコちゃん。佳ちゃんから見てどんな感じがする?」

その先を辿って、件のマコを発見する。彼女は攻撃側のチームのようだが、そういうえぼ一度もシュートした姿を見ていない。それどころか保持したボールは軒並みすぐに奪われてしまっていて、初見だが動きもどこかぎこちないように見えた。

「なんというか、まだ緊張してしまっているみたいですね。身体がガチガチでうまく動いていないように思えます。必殺シュートを覚えられる素質があるだけに、本来の動きが見れないのは残念です。他のメンバーは楽しそうにしているのだから、その波に乗ってしまえばいいのに……」

私に注視されていることに気付いたのか、マコの顔がさらに赤みを増した。ちらちらと何度も私のことを伺い見て、その度に動きが悪くなる。

ここまで重症であるのなら、私はもう帰った方がいいのではなからうか。

痛々しさすら感じるその姿に、後ろ向きな考えが頭をよぎる。実際三割くらいは本気で撤収の言い訳を考えていたのだが、マコを傷つけないような言葉を探し始めて間もなく、その思考に秋さんの手によって堰が下ろされた。

「……………だよね」

その声の色に、私ははっとして振り向いた。

どこかすごく遠い場所から肩に触れられたような、釈然としないその感覚は、しかし気にする間もなく掻き消えた。

瞬きする間に秋さんの表情から苦悩の色は消えていた。少しだけ明るさを取り戻した彼女に私は疑問を覚えるも、その問いは発声されることなく、次の瞬間、私の思考は意識ごと秋さんの言葉に向いていた。

「あつ！佳ちゃん見て。マコちゃんが必殺シュート打ちそうだよ！」

一拍と空けずに私の視線はコートへ行った。ゴール手前ではなるほど、フリーのマコがボールを蹴り上げ、高所からのボレーシュートを放たんと、今まさに脚を振り上げている。ボールの周囲を彩る集った力の光芒は、まるで彗星のようだった。

溜めもシュート体勢も大きな問題は見当たらない。荒はあるが、これなら七割ほどは完成しているといえそうだ。

後はそれをどう放つか。前段階でこれだけ完成しているのなら、彼女の実力的にもすでに必殺技の形はできているのだろう。

はたして私が口を挟む隙があるのか。アドバイスすると言った手前、何か言うことを見つければと若干の不安感を抱えながら、私は固唾を飲んで彼女を見守る。

きつと私だけではない。円堂さんも他のチームメイトも、このままマコの必殺シュートが放たれるさまを想像しただろう。

しかしそこに黒点が一つ。ほんの一瞬、私とマコの視線がかち合ってしまった。

彼女はまたしても、自身の緊張に心を乱されたのだ。

滑らかに動いていたマコの身体が強張ると、タイミングがずれたためにボールの光芒が四散した。

あの彗星のような輝きは見る影もない。このまま行けば普通のボレーシュートか、あるいは無理に放とうとして必殺技の残滓に身体を流されることになるだろう。そしてマコには、そんなことを冷静に考えられるような余力は残されていなかった。

無理を押ししてアドバイスをお願いしたお姉さんの前で無様は見せられない。何が何でも必殺技を打たなければと、そんな思いが先行してしまったのだろう。空中で体勢を崩したマコが、瞬間的に選んだのはそっちだった。

「グウ……ッ！」

ボールに向けて無理矢理身体を捻り、肺が潰され空気が漏れる音がする。苦しげに顔を歪め、彼女はやつとの思いでボールを足に触れさせた。

しかし案の定、ボールはわずかに明滅したかと思うと、次の瞬間そのあり余った威力でマコの身体を吹き飛ばした。

「あ、危ないっ！」

秋さんの悲鳴。マコが背中から落ちていく。

だがこの結末を予期したのは私だけではなかった。本来であればマコのシュートを受け止めるはずだった彼、最も近くでマコの不調を目にしたであろう円堂さんは、マコが体勢を崩して落下するよりも早くに動き出していた。

「きゃんっ！」

「うおっ！」

結果的に、マコが地面に激突するよりも早く、円堂さんのキャッチが間に合った。もちろんキャッチしたのはボールではなくマコ自身の身体だ。

小学生の女の子とはいえ、さすがに高所から降ってきた人体を完璧に受け止めることは難しかったらしく、ドスンと尻もちをついてはいたが、どうやら二人とも無傷で済んだようだった。

秋さんの「よかった……」というため息に心底同意して胸をなでおろし、浮きかけた腰を落ち着ける。円堂さんに救われたマコも、恥ずかしいやら申し訳ないやらで顔色を滅茶苦茶にし、それを円堂さんに慰められていた。

その慰撫の輪に他のメンバーも加わって、マコの感情も落ち着きを見せ始める。多少ヒヤツとさせられたが何も問題はない。むしろこの事件でマコの緊張も吹き飛んでしまったようで、その表情には笑みさえ見れた。

まさに雨降って地固まる。皆がその光景に破顔し、温かさを覚える。しかし、その清

涼な雰囲気の水を差す者が、イナズママークの橋の下から現れた。

「おいおいおい！だれですかあ、こんなもん蹴りやがったのはア！」

嫌味たらしいだみ声に、皆の視線がそちらへ向いた。

彼らは男二人組だった。長身痩躯の男と、反対に小柄で横に幅広い男。いかにも不良といったふうな格好で、こちらを威圧するように睨みつけている。

そしてその足元に一つ、サッカーボールが転がっていた。

それが意味するところにすぐさま気付いた遠藤さんは、慌ててそいつらの元に向かう。そのほとんど同時に、私もまた席を立った。円堂さんを見る不良たちの眼にありありと浮かぶ尊大な気配は、どう考えても彼の謝罪だけで済まず気があるように思えなかつたからだ。

その危惧は残念なことの中してしまった。しかも想像よりも暴力的に、だ。
どつ

鈍い音。不良たちに頭を下げていた円堂さんが、お腹を抱えて崩れ落ちる。小太りのほうが問答無用で前蹴りを打ち込んだのだ。

「円堂くん！」

悲痛な声を上げる秋さんを制し、私は前に出た。奴らを刺激しない程度の笑みを顔に張り付け、怯える小学生たちの前を通る。

円堂さんには悪いが、最初の原因を作ったのはこちらだ。無論、暴力に訴えた奴らが正義とは程遠いところにいることも事実だが、それを言ったところで奴らは原因を笠に着て、引き下がることはないだろう。

何の実ももたらさない奴らに付き合うことはない。その考えで私は奴らを適当に追いついておく口を開いたのだが――

「おっ！見てくださいよ、安井さん！結構いい女！」

「なんだ、お前このザコの彼女か何か？だつたらちようどいい。こつち来いよ。俺らとデートしよーぜ？こんなくんだりねえ蹴りなんぞやめてよオ。なあ、わかんらる？」

吐しゃ物みたいな性欲濡れの視線と、あまりにも不快な内容の言葉に、私の『下手に出てやろう』という最後の情けはあつという間に消え去つた。

「あら、今どきの不良は随分と饒舌なんですネ。おサルさんよりも小さい脳味噌で言葉を話せるなんて、私すつごく驚いちゃいました。まあその代わり……ふふ、内容はとても陳腐で下劣なものでしたけど。アウトローを気取る前に、きちんとお勉強なさることをお勧めします。おバカさんのままでは誰もデートなんてしてくれませんよ？」

掛け値なしで満面の笑みと共に、あざとく小首を傾げてやる。

まあ所詮、中学生に程度の低い難癖をつけるしか能がない不良擬き。小太りは言葉を理解するのに時間がかかっている様子だったが、一方長身のほうは気が抜けるほどあつ

さり私の挑発に乗った。

「は、ははッ！言つて、くれるじゃねえの、この女ア……」

青筋を立てた長身が、怒りを抑えきれないのか唇の端を痙攣させてゆつくりと近寄ってくる。

「べ、ベータ……ッ！」

「佳ちゃんッ！」

次の瞬間起こるであろうことを予見した円堂さんと秋さん、そして子供たちから痛心の視線を感じる。しかし私はそれに答えることなく、柔和な笑みで長身と対峙し続けて——一瞬だけ、地面に転がるサッカーボールに眼を向けた。

「女だからって、オレに舐めた口利いたらどうなるかア……教えて、やるぜエツ!!」
見せつけるような前動作の後、迫力も何もないテレフォンパンチが私の顔面めがけて飛んだ。

秋さんの悲鳴と、下卑た不良の表情。そして迫るへなちよこな拳。それらすべてを冷静に見切つて、まさにそこしかないというタイミング、私は動いた。

サッカー尽くしの今日一日で鮮やかに蘇った過去の記憶、現役時代は何度も打ち放つた必殺技の要領で、私はサッカーボールを踏みつけた。

靴の裏でボールが滑り、土が巻きあがる。ほんの少し靴の角度を変えてやれば、スト

ンピングされたボールは強烈にバックスピンして、跳ね飛んだ。

「ぐほっ！」

抑えから放たれたボールは狙い変わらず、アッパーカットのように長身の不良の顎を捉えた。威力と回転の力を余すことなくその一点に伝えた結果、ボールは不良の身体すら持ち上げ、吹き飛ばす。

数メートル飛んで墜落した長身の不良は起き上がらない。代わりに、大口を開けて唾然とする小太りな不良のほうに、私はまた全開の嫌味を笑い告げた。

「あらお可哀そう。『くだらない球蹴り』なんて言ってしまったから、ボールが怒ったんでしょか。不思議ですねえ」

そこまで念入りに教えてやって、ようやく小太りも状況を理解したのか、その顔に怒りが満ち始める。敵愾心に肩を怒らせながら私を睨め付け数歩進み、そして目の前に降ってきたボールに脚を止めた。

吹き飛ばされた片割れのことを思い出したのか、小太りはボールを凝視したまま歯を食いしばり、硬く握りしめた拳を震わせた。

「くッ……………この……………こんなもん……………ッ！」

忌々しげに吐き捨てると、小太りは大きく脚を振りかぶった。弾むボールに集中するあまり重心さえふらふらで、なんとも間拔けな体勢であったが、運のいいことに奴は空

振りして無様にひっくり返ることなく、辛うじてボールを蹴ることに成功した。

しかし、恐らく私を狙ったのであろうそのボールは、ヘロヘロとあらゆる方向へ飛んでいく。

無駄に斜め回転がかかったそのボール。もしこつちに飛んで来たらボレーで返してやろうと、スカートを気にしていた私は、曲芸じみたチャレンジをする必要がなくなつたことにこつそり安堵してそれを見送つた。

自分のことに気を取られ、そのことが一瞬間から抜け出てしまったのだ。

視界からボールが消えて、私はようやく気が付いた。あのボールが向かつた先には、まだマコたちが――

「……ッー」

私は息つく間もなく振り向いた。

回転によって威圧的なうなりを上げるボール。それを怯えた目で見つめるマコたち。どう考えても間に合わない。

わかっている、私の身体は動いた。反射的にボールを追つた足が一步踏み出す。

遅れて身体も追隨して振り向き、ボールを真正面に据えた視界。私はそこに、彼の姿を見た。

恐らく、堤防のほうからジャンプしたのだ。白髪ツンツン頭の少年が、ボールの前に

突然飛び出した。

キリ、と引き締まった目がボールと、そして不良を睨み、見事な姿勢制御で滑らかに動いた彼は、空中に飛ぶボールをその時蹴り返した。

火炎を巻き散らし、竜巻のような尾を引きながら、ボールは私の横を突き抜ける。背後で「おひゃあつ！」と小太りの間抜けな声がして、次いで長身の「ぶへっ！」という既視感のある断末魔が聞こえた。

身体に二、三步と流された私は、頬に残る火炎の熱を感じながら振り返る。長身の不良は顔に煙るボールをめり込ませ、小太りの不良はそれを見てまた大口を開けていた。

「や、安井さあん！て、てめえ……」

と、馬鹿の一つ覚えに口火を切った小太りは、次の瞬間、瞳に先の白髪の少年の鋭い視線を浴びるや否や顔を青くし、踵を返した。

「お、覚えてろよーッ！」

お手本のような捨て台詞を吐いて、気絶する長身の不良を担ぎ小太りは走り去っていく。それを呆然と眺めていると、ダメージから立ち直ったらしい円堂さんの、いつかのサッカーバカらしい声色が鼓膜に突き刺さった。

「待ってくれ！お前のシュートすげーな！もしよかったら、俺たちと一緒に練習しないか？」

続く言葉はない。その時ようやく我に返った私が振り向くと、件のツンツン頭の少年は円堂さんに背を向け、階段を上っていた。

その後姿に私ははつと思ひ立ち、階段下で佇む円堂さんに近寄ると、告げた。

「もう遅い時間ですし、申し訳ありませんけどそろそろわたしも失礼しますね？」

私の存在が頭から抜けていたのであろう円堂さんが狼狽しているうちに、私はコートの子供たちに頭を下げた。

「すみませんでした。私が彼らを不用意に煽つてしまったせいで、皆さんを危険に晒してしまいました……」

「そ、そんなことないですっ！わたしも、あいつらにはムカついたし……そ、それにつ！誰もケガしなかったから、大丈夫ですっ！」

もう一押しをする必要もなく、瞬時にそう言ってくれたマコに続いて周囲の男の子たちも首を縦に振る。その許しに淡く微笑んでから、時短の礼にと、私はマコに耳打ちをした。

「マコさんの必殺シユート、ちゃんと打てれば十分強力なものになると思いますよ。後は力を入れ過ぎないようにして、自信を持ってください」

すると今度は嬉しそうにして顔を赤くする彼女に、「それでは」と会釈すると、円堂さんと秋さんにも礼をして、私はその輪から立ち去った。堤防の階段を上りきるころには

もう皆が気を取り戻したらしく、練習再開を告げる円堂さんの声を皮切りに、子供たちの微笑ましい喧噪が河川敷に響き渡っていた。

ツンツン頭の少年に便乗しようやく脱出に成功した私は、その光景を見ながら数秒呆けると、ひとりごちた。

「……まあ、どうでもいいことよね」

どうにも目を引かれてしまう彼らの様子に眩くと、私は無理矢理視線を切って歩き出した。

「ぼーつと見ていても、何の意味もありません」

平坦に言う自分の声を聴きながら、私の脚は錆の浮いた橋名板に差し掛かった。どうせなら道を戻らずに馴染みのない帰路を辿ってみようか、なんて好奇心がないわけでもなかったが、誰かに見られれば品行方正で通っている私の印象が壊れかねないと、すぐに取りやめる。

「もう日も沈んじやいましたし」

夜に通学路外を徘徊して、あいつらのような不良に見られるのはぜひとも遠慮したいところだ。

とりとめもなく思考を回しながら、橋名板の角を曲がって稲妻マークの橋に入る。すると――

「おい」

数歩先、剥き出しの主構に背を預け、とつくに去つたと思つていたあのツンツン頭の少年が、私を待ち構えていたかのように鋭い視線を向けていた。

突然の登場と、身構えずに受けた眼光のせいで私は普通に驚いた。それでも、彼が背を離して私に向き直る間に平静を取り戻すと、私は子供たちにやつた時と同じように頭を下げて、言った。

「さつきはありますがとうございます。おかげで誰もケガをせずに済みました。皆の分も、お礼を言わせてください」

「……………」

返事がない。さつきもそうだったが、無口な性質なのだろうか。あるいはただのコミュニケーション障か。同級生のあの男の子のように、女の子と話すのが恥ずかしいお年頃なのか。

どうであれ、反応がないのであればしようがない。

とにかく礼は言ったのだからと、私は流れ作業的に会釈して、彼の隣を通り抜けた。その直後だった。

「お前は、何故サッカーをやめたんだ」

「はい？」

顔だけで振り向くと、思いがけず近い距離にあの引き締まった表情があつた。

「あつちの女子と話していただろう。サッカーをやめたと。それに不良共を倒したあのボール、あんなことができる技術を持っていてサッカーができないわけがない。何故やめた」

(なんで私たちの会話を聞いているんですか? ストーカーですか?)

ぐいと飲み込み、言葉を返す。

『何故』、ですか。そちらこそ何故です? 見も知らぬ女の子がサッカーをしなくなった理由なんて、知ったところであなたには何の利益もないじゃないですか」

「……俺も、だからだ」

質問で返された彼はしばらく苦悶するそぶりを見せた後、絞り出すように言った。

首を傾げながら、私はまた尋ねる。

「あなたも、サッカーをやめたんですか?」

「……ああ」

それは果たして私の質問に対する答えなのだろうか。疑問ではあるが、うつむく彼にそれ以上答える気配はなく、拘束されるのも面倒だと、私は一つため息を吐き、答えた。「別に、ただ飽きただけです。サッカーを、楽しいと思えなくなった。それだけです」
本当に、彼はこんなことを聞いて何がしたかったのか。

何を求めたのか知らないが、私のこのつまらない理由に彼も肩を落としたことだろ

う。そう思ったのだが、意外にも彼の表情には落胆などはなく、それどころかわずかに目を見開き驚愕しているようだった。

「……？私、何か驚かれるようなこと言いました？」

つい尋ねると、彼は小さく「いや……」と呟き、そして訝しげな眼をして言った。

「サッカーを楽しめていないと、そんなふうには見えなかったんだ」

後編

あの日、円堂さんに、サッカーに情熱を抱いていたころの自分を想起させられた時から、この高揚感に似たもやは胸の内にあつた。

円堂さんたちの姿を見て、きつと懐かしさでも感じたのだろう。サッカーに飽きる前の、ボールを見るだけでワクワクしていたあの頃を思い出して、それを彼らと重ねているのだ。何の疑いもなく、私はそう思っていた。

だから私は夕暮れの橋の上で、彼、豪炎寺修也に「サッカーに飽きているように見えない」と困惑された時、次の瞬間自身がそれを笑って否定するものだと思っていた。「くだらない。そんなわけないじゃないですか」と一笑に付すものだ、理性で澄んだ思考でそう確信していた。

しかし、そうはならなかつた。彼の言葉が聴覚野を叩いた直後、私は大どらを鳴らしたかのような激しい衝撃を受けていた。

とても笑い飛ばせない。そんな気が一瞬で吹き飛んでしまうような、すさまじい雷撃が、その時私を貫いたのだ。

豪炎寺さんが指摘したこととはつまり、私は深層心理ではサッカーを嫌っていないの

ではないか、ということ。今の私も、過去の私のようにサッカーの楽しさを感じることもできるかもしれない、ということだ。

そのことに気付いた瞬間の、この衝撃。理性的に考えればただの与太話でしかないこの可能性が、私の心の奥深くで微かに熱を醸し出した。封じ込めたものが、衝撃で歪んだ隙間からちらりと顔を見せているような、そんな気がした。

えもいわれぬその感情は、その場で直視するにはあまりにも不可解だった。私はその感情を抱えたまま家に逃げ帰り、一晩眠ってようやく疑問を自覚したのだ。私はその

私はサッカーに対して、本当に失望感を感じているのだろうか。

今までずっと、私はサッカーを楽しいものだと思えてきた。しかし、人から見るとどうやらそうではないらしく、その評価に私も心のどこかで、恐らく同調している。

サッカーを好く気持ちと嫌う気持ち。二つのその感情は、同時には存在しえないものだ。

どちらかが偽物なのだ。

いや、言い直そう。知りたいのは真偽ではなく、

今の私がサッカーを楽しむかどうか。

あの充足感を、また再び感じたい。情熱も何もない空虚な毎日もう飽き飽きなの

だ。

そのことを、私はずっと考えていた。そんな私にとって、たった今円堂さんよりもたらされた提案は、まさに渡りに船だったのだ。

「今回限りの助っ人でもいいからさ、明日の帝国学園との練習試合、一緒に戦ってほしいんだ。頼むよベータ」

帰り際、円堂さんが校門前で待ち伏せしていて、あえなく発見されてしまった私は、彼に両手を合わせて拝まれていた。

彼がこんな行動に出る理由は言わずもがな、一週間ほど前に突然決まった練習試合。しかも相手が少年サッカー界最強との呼び声高い帝国学園で、にもかかわらず負けたらサッカー部が廃部になってしまうという背水の陣。おまけに部員が彼を含め七人しかおらず、彼が部員を求めて校内外を駆けずり回っているというのは周知の事実であった。

もう後がない彼の標的に私が選ばれることはそうおかしくない。それにしても嫌にギリギリのタイミングだが、まあそれはどうでもいい。恐らく秋さんの遠慮だろう。

最終的に疑問を証明する機会が訪れたのだから、彼ら彼女らの思惑など関係がないことだ。

「いじですよ」

飾らず端的に言うと、円堂さんがばね仕掛けのように顔を上げ、あからさまに信じられないというふうに呟いた。

「……マジでっ？」

「はい。マジです」

みるみるうちに表情が明るくなってゆき、やがて彼は爆発した。

「いやったああああ!!これで十一人そろった!試合ができるぞおおおお!!」

拳を突き上げて全身で喜びを表現する彼に便乗して私も適当な笑顔を纏い、「ただし」と付け加える。

「背番号はどうでもいいですけど、ユニフォームは新品のものをお願いしますね?それが条件です」

「ああ!新品だな、任せてくれ!」

本当に任せて大丈夫なのか心配になるほどの狂喜乱舞っぷりだったが、問題はないだろう。いかに勉強ができずとも、好きなことに関する物覚えは別だろうから。

(……本当に、サッカー好きなんですね)

下校する他の生徒たちの視線など気にも留めない円堂さんのサッカーバカっぷりに、一歩引いてそんな感想を抱く。

彼のこの、とてつもないサッカーへの愛から始まったのだ。私の中から小さな燻りを探して、疑問に気付くまでに燃やしつつた。

私はふと、豪炎寺さんのことを思い出した。

六日前に初めて出会い、その翌日、秋さんのクラスに転校してきて、その容姿から一躍有名人と化した彼。

私と同じく、サッカーをやめた少年。

（あなたも、円堂さんの情熱を感じたから、見入っちゃったんですか……？）

円堂さんの、人を引き付ける何か。私もあなたも、それがあつたからあの時ボールを蹴れたのだろうか。

かぶりを振る。それを確かめるために、私はもう一度サッカーをするのだ。

「じゃあ明日。ホントに明日だからな！忘れんなよベータ！」

ボールを小脇に抱え、手を振り走り去っていく円堂さんを見送りながら、家にまだサッカーボールは残っていただろうか、私は思索する。試合前日とはいえ、軽くでもボールには触れておこう。

（それと）

選手名簿に『ベータ』と書かれてしまわないように、それだけはきちんと確認しておかねばならない。

結局あの日以降、彼が私の名前を正しく呼ぶことがなかった事実のため息をつきつ、私は一夜を明かした。

そして試合当日。

男の子ばかりの部室で着替えるわけにもいかず、校内の更衣室を中継する羽目になった私は、着替え終わると、秋さんと共にその部室へ向かっていた。

上下のユニフォームと、靴下にスパイクまで、渡されたのは間違いない新品で、それ特有の無機質な香りと違和感に、私は歩きながら身体を慣らす。

道中で生徒たちの注目を集めながら練り歩く私に、並行する秋さんがやつぱり言った。

「佳ちゃん……えっとね、実はついさつき新しくサッカーやつてくれるって人が——」
「私は別に、誰かに強制されてここににいるわけじゃないです。いつも言ってますけど」
うつむき気味の秋さんを遮って、半ば定型文と化したそれを返す。この進展のないやり取りから生じるのは、相も変わらず憂いの笑みだけだ。

だが今回に限っては、その空洞を埋めれるだけの続く言葉があった。

「……ちようど一週間前、初めて豪炎寺さんとお会いした日。あの後彼と少し話をした

んです」

「……？豪炎寺君と？」

「ええ。その時に、その……サッカーをやめた理由を聞かれて、秋さんの時と同じように答えたら、言われちゃったんですね。『サッカーを嫌っているようには見えない』って」

話が見えずに困惑顔をしていた秋さんが途端に目を丸くする。その豹変ぶりに私も少しばかり驚いて、しかしすぐさま気を落ち着けると、さらに告白を続けた。

「それでちよつと、思うところがあつたから……その……要するにです」

大真面目に宣言することにも一抹の羞恥を感じて言葉に詰まる。けれどもそれ以外の言葉が見つからず、私は言った。

「感化されちゃつたんですよ。豪炎寺さんや円堂さんに。久々にサッカーやってみようかなーって、そんな気にさせられてしまつたんです、私」

一息に吐き出してしまつてから、何故だかそわそわしてしまつて手持ち無沙汰に熱を持つ顔を扇ぐ。ちようど近くに他の生徒がいない時を見計らつたので秋さん以外に聞かれてはいないだろうが、やはりどう思いこんでもこつぱずかしかった。

おしとやかな女学生で通っているこの私が、幼馴染の秋さんに熱血少年じみたこの内心を吐露することになろうとは。

私のイメージとかけ離れるその『おかしさ』が、転じて『滑稽』と捉えられてはいないだろうか。頭に浮かぶそんな不安さえ子供っぽく思えて、私は気疲れに盛大に嘆息した。

そのため息を突き破って、秋さん酷く明るい声色が私の意識を引っこ抜いた。

「そっか……そっかあ……！」

顔を向けると、どういった心境なのか、まるで泣き出す直前のように顔を歪ませ瞳を潤ませ、にもかかわらずその感情はどう見ても喜びのそれで、しかもそれを爆発させる直前でぎりぎり踏みとどまっているかのような、そんな表情で秋さんは私を見つめていた。

あっけにとられていた間に、私は両手をぎゅつと握られた。

「佳ちゃん、私……ううん。私、応援してるからね！一緒にプレイはできないけど、ちゃんと見てるから！」

「は、はい。それは……ありがとう？」

訳もわからず感動されて、今度は私が困惑に呑まれる。

目尻に涙を光らせながら満面の笑みでうんうん頷き、ここ数年で一番機嫌がよさそうな秋さんは小走りに、もう残りわずかであったその場所までの距離を走破した。慌てて私も足を速めて追いつくと、彼女は踊るようにくるりと半回転した挙句、テーマパーク

の案内人みたいな調子で、その古びた建物の紹介を始めた。

「ついたよ佳ちゃん！ようこそ我がサッカー部へ！」

見たことがないわけではなかったが、近くで見るとやはりなかなかの傷み具合だった。

だいが年季の入った、『サッカー部』の文字が記された木製の看板。建物のいたるところには錆が浮き、校舎の陰にポツンと一つ佇むその姿が妙に哀愁を漂わせている。

これがかの有名な、弱小サッカー部の寂れた部室。

その雑妙な大きさも相俟って倉庫のようにも見えるそれは、実際秋さんと遠藤さんがサッカー部を立ち上げるまでは倉庫として使われていたらしい。部室も未だそのことが忘れられないのか埃っぽい雰囲気醸し出しているが、さすがにもうそれらしい静寂は纏っていないかった。

格子の向こうから人の話し声が聞こえる。中にいるのは当然今回帝国戦を戦うサッカー部員たちだ。一部私のように助っ人もいるかもしれないが、どうであれその十人はすでに互いの自己紹介を終えているはずだ。そのできあがった輪の中に、これから私は踏み入っていかねばならない。

昨日の下校時に話を受けたがための必然。意気揚々と扉に手をかける秋さんの後ろで、私は大きく深呼吸した。

「皆おまたせ！今回一緒に戦ってくれる最後の一人、連れてきたよ！」

重みを感じさせない勢いでスライド式の扉が開き、中の男の子たちの目が一齐に秋さんへ突き刺さる。

「お、おうっす……マネージャー、なんかすごく機嫌いいっすね……俺、もう胃が痛くてたまらないっす……」

他の九人の動揺をよそに、縦にも横にも大きな円形の人、恐らく壁山さんが、青い顔をしてお腹を押さえていた。

日ごろから秋さんと顔を合わせているであろう彼にも、今の秋さんは特別機嫌よく見えるらしい。その理由については私もぜひ知りたいところだが、とりあえず置いておく。帝国学園がやってくるまでそう時間はないだろうから。

だが、九人の視線が秋さんに次いで私を発見して、それに応えて挨拶の言葉を言おうと息を吸ったその直後、目つきの悪い短髪のピンク髪、恐らくこっちは染岡さんが、「はあ？」と遮り、嘲り気味に眉を歪めて吐き捨てた。

「おいおい円堂、お前が言ってたすっげー助っ人って、まさかこいつか？女じゃねえか。小学生のサッカークラブじゃないんだぜ、ここは」

何時かの不良を彷彿とさせるような、安っぽい挑発。円堂さんに暴力を働いた時のような怒りがない分、私の中の疼きは容易くにんまりと弧を描いた。

「あらやだ感じわるーい。グラウンドが使えないからって毎日部室でグータラしてた自称サッカープレイヤーのくせに、なに偉そうなこと言っちゃってるんですか？何なら今から教わりに行きます？私、知り合いにサッカーが上手な小学生の女の子がいるんです。きつと自称サッカープレイヤーのあなたも、彼女に懇切丁寧にお願いすれば、ドリブルくらいならできるようなになっちゃうかもしれませんよ？」

円堂さんが止める間もなく、染岡さんのこめかみにびしりと青筋が立った。反応まで不良と同じだ。きつと根っこの感性は似通っているのだろう。

「あ、あ、!?何ほざいて……てか何で知ってやがんだ！自称じゃねえ！俺は雷門のエースストライカーだ!!おい円堂！確かもう一人、『メガネ』ってやつが入部したがってただよな？この際構わねえ、十番のユニフォームもくれてやるからあいつ呼んで来い！この女とチェンジだ！」

「……ボクを、呼んだかい？」

と、不意に背後で声がして、さらに弄もよつてやろうと息巻いていた私も、そして秋さんもはつとして振り返った。

この場の十二人全員の視線を一手に握ったその男子生徒は、いかにもキザなふうに三角眼鏡をくいっと押し上げ、全く迫力なく不敵に笑った。

「やあやあ皆。ボクは目金欠流。この弱小サッカー部の救世主さ！安心したまえ、ボク

が来たからにはキミたちに敗北はない！さあ、十番を背負うボクと共に勝利を掴みに行こうじゃないかっ！」

「救世主だなんだはともかく、待つてたぜメガネ！円堂、それにお前ら！あんなサッカーやったこともなさそうな嫌味女より、こいつのほうがマシだろ？それでいいよな？」

皆が微妙な顔をする中、唯一染岡さんだけが無理矢理に喜んで、メガネさんを部室内に引き入れる。それを尻目にニツト帽の……松野さんと、これといつて特徴のない半田さんが隠れてぼそりと呟いた。

「でも、彼つてスポーツは……」

「あんまりだったような……」

染岡さんとメガネさん以外の全員が、内緒話をする二人と同様の表情で押し黙る。メガネさんの体育の成績を知らぬ者でも、彼の明らかな運動できないオーラを感じ取ることはできたようだった。

「ま、まあメガネのことはともかくさ、ベータはサッカー経験者なんだ！染岡が心配していることに關しては大丈夫だぞ！」

「そ、そうよ！佳ちゃんにはサッカーすつごくうまいんだから！少なくともメガネ君よりは！あと円堂くん、『ベータ』じゃなくて『ヨネダ』さんね！」

円堂さんと秋さんの擁護によってチーム内の空気が一気に傾く。「まあ、経験者なら

……」と呟く周囲の眼にさしもの染岡さんも主張の不利を察し、苦々しげにメガネさんを見やった。とうのメガネさんは、先までの尊大さが抜け落ちたかのように周りの雰囲気なきよきよると狼狽していて、その様子に私は少々の物足りなさを感じながらも一つ咳払いを響かせた。無音のまま私に視線が集中して、黙り込む。

その瞬間、感じた妙な圧に、私は言いかけた言葉を飲み込んだ。

注目する皆も、そこなメガネさんより私のほうが有用であると理解しているとはいえ、やはり私が初対面の女子生徒であるという点が、喉に刺さった小骨のように引つ掛かっているのだろう。向けられる瞳はすべからく「釈然としない」と私に告げていた。

男の子の輪の中に、見知らぬ異性が紛れ込む。その拒絶感を生む心理は理解できていた。理解できていたはずなのに、どうにも息苦して私はほんの一瞬気圧されたのだ。

不意に感情が停滞して、故に私は、できうる限りさわやかな印象の笑顔を表情に作り出し、顔面に貼り付ける。

予定外にもう一回息を吐き、ただ気持ちを上塗りした後、紗のかかった不快感を意識の外に追いやつて、私は再び喉から声を押し上げた。

「では改めて、私、米田佳つていいです。ご紹介の通り、昔のことですがサッカーはしていません。短い間ですが、皆さんよろしくお願ひします。

あと次私のことを『ベータ』って呼んだ人、ひねつちやいますからそのつもりでいて

「くださいね？」

微笑と共に軽口のもりで飛び出た最後の本音は正直あまり面白いものではなかったが、「うぐ」と息を詰まらせ口を押える円堂さんのリアクションに助けられ、それ以上場の空気が淀むことはなかった。

そのあとすぐに対帝国の作戦会議に議題が移り、乗じて私も先までの不快感を忘れようとかぶりを振った。

助つ人故致し方ないとはいえ、自身のポジションが余った左サイドバックであること知らされ頬を膨らませてしまったり、地響きを立ててやってきた帝国学園の壮大で武骨な黒いバスに驚いたり、帝国キャプテンのゴーグルの人からの挑発にビビった壁山さんがロッカーに逃げ込んだ挙句出られなくなったりと、語るべき出来事はいくらかあったが、しかしいずれの事件の間も、私はこの不快感、疎外感を、完全に振り切ることができなかった。

私はこんなにも割り切ることが下手な人間だったのだろうか。

自覚はなく、感情のわだかまりを抱えたまま、いよいよ試合開始のホイッスルが鳴ってしまった。

「うう……き、緊張するつす……やっぱりもう一回トイレに行きた——」

「だめですよ壁山さん。ほら、もうキックオフです。我慢して走ってください」

試合開始と同時にボールを後ろに預けた染岡さんとポニーテールの風丸さんのフォワード二人が、作戦通り敵陣へ切り込んでいく。それでも尚尻込みする壁山さんの背中を笑顔でひっぱたいてから、私もラインを上げ始めた。

作戦と言っても、この急造チームで凝ったことはできようもない。一対一でボールを取り合っても勝てはしないだろうから、パスを重視して染岡さんにボールを繋ごう、という、どちらかといえば方針に近いものだった。

下手にパスを繰り返しても結局取られるだけだと、私は思っていたのだが、どういうわけかこの作戦、うまくいっている。試合開始からたったの数分で前線組は一人、二人と順調に帝国選手を抜き去り、とんとん拍子に染岡さんに回ったボールは、あつけないほど簡単にペナルティーエリアに侵入した。

おかしいにもほどがある。サッカーから離れてしばらくたつ私から見ても、染岡さんたちの動きは特にうまいわけでもなく、それを一切止められずにキーパーとのタイムマンを許した帝国選手たちは下手すぎる。

余裕ぶって遊んでいるのだろうか。

恐らくそうだ。この程度で少年サッカー界最強などと呼ばれるはずがない。

染岡さんのシュートは決まらない。瞬間的にそう判断した私は、雷門サッカー部の輝かしい活躍に見惚れる他のチームメイトを放り出した。

その直後、不自然に一人だけ前に取り残されていた帝国選手の口元が緩んだ時、私はそいつめがけて走り出していた。

パスン

短く乾いた音が鳴って、静まり返った次の瞬間、

「鬼道！次はお前たちの番だ！」

センターラインまで一息に放り投げられたボールが、ゴーグルの鬼道さんに渡った。雷門チームは呆然とその様子を見守るばかり。

「さあ、始めようか。帝国のサッカーを」

目を付けていた帝国選手が、くるりと半身振り向いた。鬼道さんとそのフォワードの視線がかち合い、そして思いがけずふわりと、鬼道さんのパスが壁山さんの頭上を抜けた。

ちょうど壁山さんの陰に隠れて、鬼道さんは私の姿が見えていなかったのだ。

結果として、悠々宙に浮くボールが帝国選手に渡る前に、私の脚が間に合った。

「なッ！」

死角から突然現れた私に、パスを受けるはずだった帝国選手が驚愕の視線を向ける。その視線に疼きそうになる何かを自制しながら、空中でボールを奪った私はそのままドリブルでピッチを駆け上がった。

元々前線が敵ゴール側へ流れていたこともあって、センターラインまでは楽にたどり着いた。サイドバックの役割としては、さつさとミッドフィルダーの半田さんあたりにボールを託してしまいたいところだが、しかし全員がまだ衝撃から帰ってきていない。（たかがシュート一つ止められたくらいでこの体たらく。ため息が出ちやいそいです）

やむを得ず、だんごの中に突入する。当然すぐディフェンスに阻まれた。しかもその動きは先ほどまでの舐め切ったプレイが嘘であったかのように見事なもので、出会い頭に一人は抜いたがコースを制限されてしまった私は、たちまち行く手を塞がれてしまった。

どうしようかと、三方からにじり寄る敵に突破方法を模索していると、視界に染岡さんの姿が入り込んだ。この期に及んでまだ呆ける彼に苛立ちを覚えながら、ディフェンスのわずかな隙間に身をねじ込んだ私は、激情を晒し怒鳴り声をあげた。

「おい染岡……っちだ!!」

幾本も伸びる脚をなんとかかいくぐり、辛うじてボールを蹴りだすと、ようやく我に

返ったのか染岡さんの焦ったような表情。

ぼてぼて零れたボールを、フリーの染岡さんが掬い取った。デイフェンスはそのほとんどが私に集中していて、彼のことはマークしていなかったらしい。

再びキーパーと一対一で対面した染岡さんは、気合の怒号でシュートを打ち放った。

「このツ！今度こそオ！」

エースストライカーを自称するだけあり、なかなかの威力でボールは飛んだ。やや左よりに位置取るキーパーに対し、右端を狙ったグラウンダーシュート。ボールを浮かせなかったのは意表を突くためか、どうであれコントロールもよく、ボールは間違いなくゴールポストすれすれをめぐめて向かった。

それを目前にして、さすがに私も得点のホイッスルの幻聴を聞いた。しかし、恐らく一度目のシュートも同様だったのだろう。すさまじい反射神経を以てキーパーがダイビングキャッチを為した時、驚愕したのは私だけだった。

「クソツ!!」

腹立たしげに悪態を付く染岡さんと、私以外の皆が顔をしかめてすぐさま踵を返した。慌てて私もカウンターに備えようとするが、油断のないロングパスに追いつけるはずもない。

「ふんッ！」

キーパーが無言で私を一瞥した直後、鋭く蹴り飛ばされたボールは今度こそあのフォワードに渡った。ディフェンスは一人も付いていない、完全なフリー。しかしそいつはそこから前に上がるでもなく、センターサークルの中から全力のシュートを見舞ったのだ。

その超ロングシュートに、円堂さんは反応すらできなかつた。

「ゴオー——ール!!」

解説の高らかな宣言と同時にホイッスルが鳴り響き、あれだけ威勢がよかつた染岡さんも他の皆も、その弾道に目を見張る。

染岡さんのシュートなど比にもならない。一瞬にしてボールを見失つてしまうほどの威力に皆が度肝を抜かれ、そして最初に育まれた希望をなくしていった。

それからはもう酷い試合となつた。

一度あんなプレーをしたせいで私は過剰なほど警戒されてしまい、主戦場はもっぱら逆サイド。おまけに私はディフェンダーだというのに常に二人以上のマークがついて、まるでボールに触れない。味方にもどうすることもできず、そもそんな余裕があるか怪しいところだが、私を尻目に試合は進んでいった。

帝国も、これまた私のせいで懲りてしまったらしく、最強の片鱗をチラ見せし始めた彼らから、我がチームは一度もボールを取れていない。大抵がキックオフ直後にボールを取られ、こちらの必死なディフェンスを易々抜けた後、そのままゴールに得点を許す。ついでとばかりに行われるラフプレーに体力を削られ、益々太刀打ちができなくなりどんどんスタミナを消耗した結果、もはや流れ作業的にスコアボードが更新され続け、気付けば点差は20点。彼我の実力差が露骨に点数に現れるころになつてようやく、私を除け者にした長い後半戦が終了した。

(まあ、皆さんものの見事にへとへとですね)

帝国選手に散々翻弄されたチームメイトの荒い息の中、秋さんが甲斐甲斐しく世話を焼くのを横目に見ながら一口給水した後、私はそれをベンチに戻した。

私と、控えて何もしていないメガネさん以外の全員がこのありさまだ。この状態で後半戦、20点を取り返すのはいくらなんでも不可能だろう。間違いなくここにいる全員が思っていることだ。

まして疲労している当人。感じる絶望はひとしおだろう。風丸さんが疲れ切った声色で呟いた。

「どうなつてんだ帝国の奴ら……息一つ乱れてないぜ……」

「そりゃそうさ。奴らほとんど走つてないからね……ぼくらのディフェンス、全く通用

しないし……シュートするだけだから、そりゃ疲れないに決まってるよ……」

「それに比べて俺たち、完全に遊ばれてますよね……滅茶苦茶走らされて、俺もう足の感覚がないですよ……はあ、やつぱり俺たちじや帝国に勝つなんて無理だったんだ……」

地面に座り込んだ松野さんがついたため息が、もじやもじやアフロの穴戸さんに伝染する。それがさらに拡散して皆の空気が暗くなり、だからこそその最中に染岡さんの嘲笑がよく響いた。

「ふん。そうでもねーさ。一人いるだろ、うちのチームにもまだまだ体力残ってる頼もしいやつが。なあ米田？」

皆の暗い瞳が、一斉に私に向いた。その視線にあの不快感を感じながら、私はあざとく頬を膨らませてみせる。

「むうー。だって私、常にマークされちやつてるんですもん。ボールに関わりたくても関わらせてくれないんだから、しようがないじゃないですか」

「敵のエスコート付きで試合観戦ってか。ケツ、楽しそうでうらやましいぜ」
「やめろよ染岡！」

円堂さんが割って入り、染岡さんがぼつが悪そうに目をそらす。暗い雰囲気だけが残った皆の心に、円堂さんが「とにかく！」と闘志の炎を輝かせた。

「帝国のシュートは次こそ止めてみせる！だから皆、ベータを中心にボールを回して今

度はあいつらを消耗させるんだ！」

しかしその炎は、希望を打ち払われた皆を燃やし付けるには些かの外れであるようだった。

「キャプテン……話聞いてたでヤンスか？米田さんはずっとマークされてるんでヤンスよ……そりゃあ、米田さんの最初のプレーを見て、そう考える気持ちもわかるんでヤスけど……それにもし仮に後半戦、マークが外れたとして、米田さんはディフェンダーなんでヤンスよ？後ろにボールを集めてちや、それこそ奴らの思うつぼでヤンス……もう無理でヤンスよ……」

玉ねぎみたいな頭の栗松さんが億劫そうに円堂さんを諭し、重苦しく肩を落とした。その冷め切った物言いに、円堂さんの血の気が上がる。

「何言ってる！勝利の女神がどつちに微笑むかなんて、最後までやってみなくちやわからないだろ！ほら、後半戦だ！行くぞ皆！」

悲観度には差はあれど、私を含め皆が同様の諦念を再確認していたハーフタイムが終わり、のろのろと身を起こす。ポジションチェンジを申し出られるようなタイムミングは通り過ぎ、唯一円堂さんだけが勢い良く燃えて、チーム内の温度差がすさまじいことになつていた。

そんな状態でピッチに立って、士気が上がるはずもなかった。ホイッスルが鳴っても皆の表情は暗く、そしてそれは帝国側の悪意あるプレーによつてますます悪化していった。

「オラア！【ジャツジスルー】！！」

「くらえ！【キラースライド】！！」

帝国が必殺技を使い始めたのだ。素の身体能力ですら遠く及ばないというのに、必殺技もとなれば文字通り手も足も出ない。しかもその必殺技のことごとくがフアールすれすれのラフプレーで、それを受けてしまった我がチームメイトが先ほどからバンバン宙を舞っている。もはや守備は機能していなかった。

にもかかわらず、後半戦が始まってから帝国は得点どころかシュートの一つもしていない。前半戦が嘘のように攻めつ気をなくした奴らは、相も変わらず私をゲームから隔離し、ボールと選手をもてあそびながらセンターライン辺りをうろろするばかりだった。

今、奴らの中にサッカーをしているという認識はないのだろう。攻めるでも守るでもなく、ただ無為に選手が痛めつけられるだけのその光景は、到底サッカーと呼べる代物ではなかった。

理由はわからない。しかし奴らは間違いない、選手を潰すことだけを目的にボールを蹴っていた。

スタミナの消耗とか、そんな生易しいものではない。ボールを介して肉体的なダメージを与えるプレイを、奴らは繰り返している。

スライディングに隠れて足を引っかけるのはまだいい方で、酷いものだとボール越しの飛び蹴りだったり、パスミスに見せかけて顔面にボールをぶち当てたり、退場者が出ていないのが不思議なくらいの乱戦続きで、チームメイトは一人、また一人と倒れていった。

私とてその悪質プレイに憤らないわけではない。しかし、できることは何も無いのだ。

どこへ行くかとびったりくつつくマークのせいで、たどり着くころにはとつくに主戦場が変わっているし、まるでボールが示し合わせたかのように私を避けて飛んでいく。

染岡さんの嫌味の通り、私はチームメイトが倒れ行くのを見守ることしかできない。フィールドプレイヤーが私を残して地に伏して、奴らの矛先がいよいよ円堂さんへ向いても、私はそこに加わることができなかった。

ゴールネットではなく、円堂さん自身を狙ったシュートの連打を、私はただ見ていることしかできなかった。

「ひやくれつショット!!」

ホントに百回なのかはともかく、幾重もの蹴りの力が蓄えられたシュートが、とうとう円堂さんを吹き飛ばした。キーパーもろともシュートがネットを揺らし、久方ぶりのホイッスルが響き渡る。

「所詮この程度か。米田、だったか? そのディフェンダーだけは中々いい動きができるようだが、そこさえ押さえればこのザマ。後は雑魚ばかりだったな」

倒れこむ円堂さんを見下して、鬼道さんが冷淡に吐き捨てる。ゴーグルがチカつと瞬いて、恐らく時計のほうを確認すると、彼は背を向け驕慢に鼻を鳴らした。

「試合終了まで残り二十分。まあせいぜい頑張ってくれ。君たちのキックオフがないと試合が再開できないからな」

口元に嫌らしい笑みを残して、鬼道さんと共にシュートの連打をしていた帝国選手二人も去っていく。しかし数歩と行かないうちに鬼道さんがわざとらしく「ああそうだと呟いて、観客にさえ届くような張りのある声でゴーグルを光らせた。

「君たちのフォワード、確か髪が長い方だな。どうやら足を痛めているようだったぞ? 早いうちに選手交代をすることをお勧めする。この状況でプレーできるような控えがなければ、だがな」

言うとは、満足したのか今度こそ自陣へ帰っていく鬼道さんたちと、それに続く私への

マーク要員たちを見送って、私は一人取り残された円堂さんの元に向かう。身を起こそうと腕を震えさせる彼を手伝ってやりながら、私はピッチを見渡した。

士気は最低。スタミナは底を突き、疲労もピークを過ぎている。鬼道さんの言う通り、風丸さんは染岡さんに肩を借りながら足を引きずっていた。慌てて駆け寄る秋さんによってすぐに選手交代がなされるだろう。

その先に出てくるのがあのメガネさんであることも鑑みて、苦しげに眉根を寄せながらもなおお尽きない円堂さんの闘志満ちた目に、私は呆れ半分でため息をついた。

「円堂さん、部外者の私に試合の指図されるのは気に食わないと思いますけど、言っちゃいますね？ 私はこの試合、さつさと棄権するべきだと思います。勝ち目はないですし、皆さん限界ですし、危険ですし」

それに何よりつまらない。

言葉にはしないが、敵味方から除け者にされている現状、私の心を占めるこの感情は憤りよりも大きかった。前半後半と戦って、結局得たものがこれなのだ。失望もしたくなる。

ピッチに立っているのは私だけ。この先プレイを続けるのなら、もしかしたら私が一人だけで帝国の全選手を相手する羽目になるかもしれない。想像するだけで心が重くなり、その心理に私はわかりきっていた事実を見せつけられていた。

やはり私にはもうサッカーを楽しめる心が残っていないのだ。

円堂さんの熱を受けて燻った心の何か、豪炎寺さんが見た私の中のそれは、残念ながらこの試合で顔を見せてはくれなかった。きつと、気のせいだったのだ。

私の期待は儚く消えた。なればもう、これ以上試合を続ける理由も、そして熱意もない。

だから私はそれらすべての憂鬱をため息で塞ぎ、実際的な理由で円堂さんを説得しようとしたのだ。チームメイトという理で説けば、かの熱血も少しは陰るだろうと考えた。

しかし、そんな思惑は彼には通用しなかった。私は忘れていたのだ。

円堂守という何よりもサッカーが大好きなこの人間は、私ではどうすることもできなかった秋さんの闇を退けてしまうほどの、そして消えてしまったはずの私の心すら動かしてしまうほどの、真正のサッカーバカであったのだ。

「……まだだ」

先ほどまでいたぶられていた人間が出したとは到底思えないほどの頑強さが、私の鼓膜を揺さぶった。心臓が鷲掴みにされたかのようにだった。豪炎寺さんの時と似たような、しかしそれ以上に大きな衝撃が、一瞬私の脳内から『諦め』を消し飛ばす。

「な、にが……」

しかしそれに飲み込まれる前に、響いた正反対な情弱が私をそちらに振り向かせた。「い、嫌だ！もうこんなの嫌だあ！」

風丸さんと交代するはずのメガネさんがそんなことを泣き叫び、十番のユニフォームを脱ぎ捨てて逃げ去っていく。

想像の埒外の行動に私は意識を引き戻し、背を向けたまま言う。

「……十人になっちゃいました。知つてると思いますが、サツカーつて一人減るだけでも随分違うんですよ？もう、どうやったつて勝ち目はありません。それは皆さんも……円堂さんもわかっていきますよね？……なのに……なのになんで、あなたは——」

正面を睨んで立ち上がり、日の光に照らされた円堂さんの横顔を見て、私は尋ねずにはいられなかった。

「まだ諦めていないんですか……？」

勇ましい彼の顔が私を見、そしてにいつと歯を見せ笑った。

「言つただろ？『勝利の女神がどちらに微笑むかなんて、最後までやってみなくちゃわからない』つて。試合終了の笛が鳴るまで、俺は絶対に諦めない。俺たちはまだ、終わつてねえ！」

気付けば、私はそんな絵空事を言うおバカさんに魅入られていた。どうしてそう前向きになれるのか、円堂さんの眼差しに虚勢の類は一切存在せず、本気でそう思つてるの

だと理解した瞬間に、私は目を釘付けにされたのだ。

その最中だった。

「おい、誰だあれ？ あんな奴、うちのサッカー部にいたか？」

観客のざわめきをかき分け現れた彼に、私は呆然と眩いていた。

「豪炎寺さん……？」

見覚えのある白髪のツンツン頭。メガネさんが投げ捨てた十番のユニフォームを身に纏った彼が、ポケットに手をつ突っ込んでピッチに入ってくる。

「豪炎寺！ 待ってたぜ、お前を！」

サッカーをやめたはずの彼が、円堂さんの呼びかけに笑みを浮かべていた。

「どうだ。サッカーは楽しめたか？」

私を見つめ、豪炎寺さんが言った。

私は何も答えられなかった。

思いつけるのはユニフォームの襟を立てていることの揶揄とか観客の黄色い声のこどばかりで、彼の質問に対する答えが全く出てこない。私と違い、サッカーをやめた理由を打ち払ってしまった彼との間にすさまじく大きな隔たりが見えて、私はどうしても直視できなかった。

何も言わない私になぜか小さく微笑むと、豪炎寺さんは風丸さんがいたポジション、

フワードに戻っていく。

絶望的な状況下で現れた救世主の大きな背中にも他の皆が顔を上げ、狂喜乱舞する円堂さんとの相乗効果で、死に体だったチームの士気が高まりを見せる。

円堂さんが呼び寄せた、たった一人の選手が絶望一色の空気をあつという間に変えてしまった。

——うらやましい。

私はそれを、遠くで眺めていた。

皆が皆、円堂さんの情熱を受けてサッカーを楽しむ心を燃やしている。肉体的にはロボロでも、今この瞬間、チームの心は一つとなったのだ。

私を除いて。

火床が空っぽであった私に、その炎は根付かなかつた。ただ焚火のように一時の熱で私を焦がれさせ、そしていずれどこかに消えゆく。

元より種火を持っていた彼らには喜ばしいことかもしれないが、除け者にされた私にとって、傍から見るその炎は実に妬ましいものであった。

一人ぼっちの私にはサッカーを楽しむ資格がないと、そう思い知らされるから。

……キックオフの笛が重い思考を殴りつける。

いくら士気が上がるうとも実力差は変わらない。豪炎寺さんに渡る前にあっけなく

ボールは奪われ、また同じように敵が攻め入ってくる。このままではまた何もできずゴールネットが揺らされるだろう。

だが今回は豪炎寺さんがいる。他が碌に動けない以上、私と彼の二人でどうにかする以外に得点への道はないだろう。かといって、時間をかけ過ぎればまたマークに翻弄されるのは目に見えている。速攻に賭けるしかない。

私と豪炎寺さんで無理矢理にでもボールを奪い、そのままゴールまで持つていく。成功する可能性は低いと言わざるを得ないが、それでも協力する以外に方法はないのだ。

そんなことは豪炎寺さんもわかっていと思うていたのだが――

「えー……」

脇目も振らずに敵ゴールに走っていく豪炎寺さんに、私は言葉を失い呆れかえるばかりだった。

解説が試合放棄を疑っているが、それはないと信じたい。どちらにせよ豪炎寺さんは何を考えているのだろう。たとえば私の技量が本気の帝国に通用するとしても、一人ではパス回しで躲されるに決まってる。まさか私にシユートを止めろとも言うのだろうか。それができれば2人も点を取られはしなかった。

さっぱり理解できない。ボールを無視して敵陣へ切り込むことに何の意味があると

いうのか。

意図が読めずに困惑する中、ボロボロの守備を蹴散らし、近づいてくるボールに先駆けて私へのマークが復活する。

結局こうなった。センターバックは役に立たない。残ったのは円堂さんのみ。これで22点目のゴールが決まってしまう。悪あがきにマークを突破しようと試みるも、ダメだ。ボールの方向はガードが固すぎる。

何を考えているのか知らないが、これで豪炎寺さんの奇行も無為に終わった。仕方ない。せめて次のキックオフでは、まだ可能性の高い悪あがきができるよう、彼と話をしておこう。

そんなことを考えながら、私は円堂さんがまだましなやられ方で済むように軽く祈ってそれを眺めた。

「行け。【デスゾーン】開始」

鬼道さんから指示と一緒にボールを受けて、帝国の三人が宙に飛んだ。ボールをまんなかに三角形の形で回転し、力を高める。

鬼道さんの言う【デスゾーン】が、先の【ひやくれつショット】を大きく上回る大技であることは明白だった。私のお祈りは空しく終わり、円堂さんはより悲惨な目にあってしまうことだろう。

私はこの時、一人だけで諦めの眼を、その光景に向けていた。本当に、私だけだった。私はこの時まで、本当の意味で円堂さんたちとサッカーをしていなかったのだ。

「ベータッ!!」

刻一刻と力を増していくボールをあの眼で見据えて、円堂さんが叫んだ。

「ゴールは、俺に任せろ!!」

私の心の中でもやが砕け散り、その奥に赤々と燃え盛る炎が見えた。

その時感じた感覚を言葉で表したなら、たぶんそんな激震だった。

「ベータ? 何かの暗号か? どちらにせよもう遅い! くらえ! 『デスゾーン!!』」

暗黒色とでも言おうか、禍々しい黒にその身をうねらせ、ボールが放たれた。

同時に私はそれに背を向け走り出す。『ベータ』が私のことだとわからないマークたちは、固めたガードの反対方向に逃れた私に気付かない。

私の内心が円堂さんの言葉に呼応して、まるで地割れのように塗り固められた失望感を砕き割った。

その破られた防壁から沸き上がったのはこれだった。

今までの陰鬱な感情が嘘のよう。サッカーボールを見るたび感じた寂しさが跡形もなく消え去って、自分でも信じられないくらい心が高鳴っていた。

瞬間的に理解した。豪炎寺さんの言う通り、私はサッカーを楽しむ気持ちを失くした

わけではなかった。

嫌いになりたくなかったからこそ、心の奥深くに封じ込めていたのだ。

一人でするサッカーなど、何も面白くない。その蓋を、円堂さんが壊してくれた。見えていかなかっただけで、私の情熱はしつかりと燃え盛っていた。

本当の仲間が、背を預け、預けられる仲間の存在が、豪炎寺さんのように私を信じさせたのだ。

「うおおおおお!!ゴット、ハンドオオオオオオオオ!!」

絶叫が、必殺技がぶつかり合う衝撃と一緒に私の身体まで到来する。

振り返りはしなかった。だって信じていいのだから。

「まさか……【デスゾーン】を……」

追い越しざまに鬼道さんが呆然と呟くのを耳にして、私は半身振り向いた。

シュートを止めた円堂さんと私の視線が合わさって、どちらからともなく笑みを浮かべた。

「行つけえ!!ベータアアアアア!!」

希望のボールが、繋がった。

「……ツ！デیفフェンス！」

我に返った鬼道さんの指示に数人が気付くも、その動きに冷静さはない。

それに、このボールだけは渡すわけにいかないのだ。
フェイントで抜き、あるいは力づくで突破して、そして――

「豪炎寺！」

豪炎寺にパスが届いた。

ボールは天高く蹴り上げられ、竜巻のごとくそれを追った豪炎寺によつてその炎が放たれた。

「ファイアトルネード！！」

河川敷で不良を倒したあの熱気が、何十倍も威力を増してゴールめがけて飛んでいく。しかし、鬼道さんの指示はかのキーパーにも届いていたのだ。

「止める！」「パワーシールド！！」

そいつは準備万端とばかりに待ち構えていた。跳躍し、地面を殴りつけて発生する衝撃波。そこに「ファイアトルネード」は激突した。

「うおおおおおおお！！」

キーパーの雄叫びに、衝撃波の壁がより力強い光を放つ。炎の螺旋と光の障壁が火花を散らし、そしてとうとう均衡が崩れた。

防がれた。

豪炎寺のシュートは衝撃波の壁におびただしいほどの亀裂を入れたが、しかし貫くに

は至らなかつた。ボールは弾かれ、明後日の方向へ飛んだ。

「ふっ……お前の負けだ、天才ストライカー」

ひび割れた壁越しに、キーパーが得意げに笑う。着地し、それを正面から向けられた豪炎寺は――

「ああ、そうだな。だが――」

「オレたちは、まだ負けてねえぞ!!」

ボールをトラップした私^{オレ}を見て、不敵に笑つた。

「行くぜ!」

脚を高く掲げ、ボールをストンプ。力を浴びて二つに分かれたボールが舞い上がり、私もまた飛び上がる。そのまま空中で身体を捻り、二つのボールをオーバーヘッド。

これが私^{オレ}の必殺技。

「ダブルショット」!!

蹴り出したボールは一つに統合され、二発分の威力を得たそれは脆い障壁を易々突き抜けた。

ゴールネットがシュートの威力に引き伸ばされて歪な凹凸を作る。私と豪炎寺さんと、そして円堂さん以外の皆が無言でそれを見つめ、ようやくボールが地面に付いた。

「ゴ、ゴオー……ール!!」

ホイッスルが鳴り響き、我がチームも観客も沸き返った。それを一身に浴びながら、私は恋焦がれた快感に陶酔のため息を吐いた。

その後、どういうわけか帝国学園が試合放棄を宣言したことで、1―2―1という大差ながらも私たちは試合に勝利した。廃部の危機も乗り越えたのだ。

私の分もチームメイトたちにもみくちやにされる豪炎寺さんと、私に抱き着き嬉し泣きをする秋さんをなだめながら、それを自製のタネにして、私は込み上げる熱を胸元で留めていた。

楽しかった。それでいっばいだった。

「やつぱりすげーや豪炎寺！これからも頼むぜ！」

歓喜するチームメイトのだんごから逃れた豪炎寺さんに、円堂さんが手を差し出した。豪炎寺さんは悩むそぶりを見せた後、数秒目を瞑るとその精悍な表情に笑みを作り、その手を取った。

「あんまり期待されても困るんだがな。まあ、よろしく頼む、キャプテン」

何時か以上に全力で喜ぶ円堂さん。そのはっちゃけぶりを手で制し、豪炎寺さんが私を向いた。

「俺はまたやるよ、サッカー。そう決めた。お前は——ベータはどうするんだ？」
にやりと口角を上げる彼と円堂さんを見やって、私は微笑んだ。

とつくに心は決まっていた。

「豪炎寺さんが三回^冊まわって『わん』って言ったら、一緒にサッカーしてあげます♡」
その後、この笑い話^冊は、雷門サッカー部での私のキララ付けに多大な影響をもたらしたのであった。